

発行

北海道ポーランド文化協会  
〒001-0032  
札幌市北区北 32 条  
西 5 丁目 2-32-902  
佐光方  
電話・FAX  
011-790-8610

# POLE

第 74 号 2012. 4. 20  
北海道ポーランド文化協会誌

北海道ポーランド  
文化協会  
創立25周年!

Happy 25<sup>th</sup> Anniversary!



第 60 回  
例会

POLAND POLAND POLAND  
ポーランド  
映画  
セレクションII

5月5日(土)~6日(日) 10:30~  
北大学術交流会館(北8西5・正門入って左)



チェホフスキ監督のドキュメン  
タリー作品『モルトケ』上映(Cプ  
ロ)やワークショップもあります。



コヴァルスキ家の歴史 (60分) モルトケ (38分)

## 映画製作の底力を感じる作品を 一挙公開!

--- 去年、好評だったポーランド映画セレクションの  
“第2弾”となる上映会 ---

人生の不条理、悲しみ、不正、希望を少年少女や  
老女の姿を通して描いた、美学派女性監督ドロタ・ケ  
ンジェジャフスカの『僕がいない場所』、『木洩れ日の  
家で』は自信をもってオススメです!

また、日本初公開のドキュメンタリー作品とともに  
ふたりの監督をお迎えし、さらに、5カ国共同記録映  
画製作プロジェクト「世界の夜明けから夕暮れまで」  
の中から3作品を上映(3/5~16 岩波ホール上映終了)。

ワークショップではポーランドの巨匠の作品を例  
にチェホフスキ監督が分析・解説。

どうぞ充実のラインナップをお楽しみください!

上映実行委員 氏間多伊子(うじま・たいこ)



第 61 回  
例会

創立 25 周年記念コンサート



5月12日(土)

開演 PM 1:30 (開場 30 分前)  
札幌コンサートホール Kitara 小ホール

〜ショパンとロマン派の作曲家達〜



フレデリック・  
フランソワ・ショパン  
(1810-1849)  
Fryderyk Franciszek  
Chopin

演奏部門は、これまで  
会員の皆様、運営委員の  
皆様のお力添えを頂き、  
有意義な演奏会を開催し  
てきました。今年は創立 25  
周年を記念して、上記の  
日程での開催です。

今回は〜ショパンとロマ  
ン派の作曲家達〜の副題  
のもと、演奏曲の幅を広げ

ました。札幌では滅多に聞けないタウジヒの作  
品も演奏。わずか 30 歳で夭折したタウジヒは、  
リストにも師事したピアニスト・作曲家です。演奏  
曲は、今回演奏されるタウジヒのピアノ曲はモニ  
ユシュコ作品をもとにした幻想曲。また、他に  
演奏される声楽曲の作曲者キュイはモニユシュ  
コに師事しました。このように、このプログラムに  
は、タウジヒ、モニユシュコ、キュイという互いに  
関連しあう作曲家の作品が循環するように組み  
込まれています。

ピアノソロ、二台のピアノ、歌曲、ポーランド  
語の詩の朗読等、変化に富んだ華やかさで、  
充分にお楽しみいただけることと思います。

美しい新緑の午後ひととき、ご来場をお待ち  
致しております。

演奏部会 薄井豊美(うすい・とよみ)

これから繰り広げられるイベントへの参加と広報活動へのご協力とご支持を宜しくお願い致します。なお、  
上記の例会の<招待チケット>を同封いたしましたので、ご確認くださいませようお願い致します。(事務局)



第60回  
例会

## POLAND ポーランド POLAND 映画 POLAND セレクションII

詳細は同封したフライヤーをご覧ください。

なお、当日は招待券1枚(Aプロ・Bプロ・Cプロのいずれかを選択)を  
忘れずにお持ちください。

上映スケジュール

5日(土)

上映時間(終了時間)

10:00～ 開場

10:30 (12:10) **Bプロ** 『僕がいない場所』

12:30 (14:15) **Aプロ** 『木洩れ日の家で』

14:45 (15:00) 舞台挨拶

『コヴァルスキ家の歴史』A・ゴウエンビエフスキ監督

『モルトケ』W・チェホフスキ監督

15:00 (16:40) **Cプロ** 『コヴァルスキ家の歴史』『モルトケ』

16:40 (18:10) ワークショップ **無料**



6日(日)

上映時間(終了時間)

10:00～ 開場

10:30 (12:15) **Aプロ** 『木洩れ日の家で』

12:30 (14:10) **Bプロ** 『僕がいない場所』

14:45 (15:00) 舞台挨拶

『コヴァルスキ家の歴史』A・ゴウエンビエフスキ監督

『モルトケ』W・チェホフスキ監督

15:00 (16:40) **Cプロ** 『コヴァルスキ家の歴史』『モルトケ』

16:50 (18:50) **Dプロ** 『世界の夜明けから夕暮れまで』

〈ベラルーシ・ミンスク篇〉〈ウクライナ・キエフ篇〉〈日本・東京篇〉



### ポーランド映画人による 学生ワークショップ& ドキュメンタリー制作プロジェクト

『世界の夜明けから夕暮れまで』

The World From Dawn Till Dusk

若者たちがとらえた今、街の表情、人の暮らし。



—ベラルーシ・ミンスク篇— (39分)

若者たちがベラルーシの首都ミンスクを疾走する。ア  
クロバティックに壁を登り、さまざまな場所を通り過ぎ  
ていく。その傍らに見えてくる暮らし、家族、孤独…



—ウクライナ・キエフ篇— (44分)

ある晴れた夏の日の午後、ドニエプル川の遊覧船で休  
日を楽しむキエフの人々。時に楽しく、時に深刻な会  
話とともに、さまざまな人生が船上でクロスする。



—日本・東京篇— (40分)

日本の朝はラジオ体操とともに動き出す。3.11の避難  
所、被爆をテーマにした演劇、鎮魂の歌声から日暮れ  
の精霊流しへと、イメージの連鎖も試みられている。

# チケット

前売りは北大生協、市内主要プレイガイドでも取り扱い中。

<会員はチケット1枚(招待券)を同封しましたので確認し、当日ご持参ください>

【前売り券】 Aプロ・Bプロ・Cプロ / 一般 1000円、シニア 1000円

【当日券】 Aプロ・Bプロ・Cプロ / 一般 1200円、シニア 1000円、学生 500円

Dプロ / 一律(一般、シニア、学生) 500円

【特別上映作品】 500円(『世界の夜明けから夕暮れまで』)

主催：「ポーランド映画セレクションII」実行委員会(北海道ポーランド文化協会、札幌映画サークル)

予約・問合せ先：札幌映画サークル

電話・ファックス：011-747-7314

協賛：駐日ポーランド共和国大使館

後援：札幌市、札幌市教育委員会

# 監督+撮影コラボによる 最高の作品ができるまで

佐光 伸一

監督・脚本は、子どもを主人公にした傑作の数々で、ポーランドで最も注目されている女性監督ドロタ・ケンジェジャフスカ=写真左=。また、現在では製作が非常に難しい驚異のモノクローム映像を実現させたのは、ドロタの夫でもあり、本作ではプロデュースも手掛けるアルトゥル・ラインハルト=写真右=。

冒頭から私事で恐縮であるが、筆者はポーランドに2年ほど留学した経験がある。アンジェイ・ワイダやポランスキー、ケシロフスキなど、巨匠たちの作品は日本でよく知られているが、「同時代のポーランド映画はどうなっているのか」という関心から、現代ポーランド映画にもできるだけ足を運んだ。2年の滞在の中で、とりわけ心に深く刻まれた2つの作品があった。ひとつは、多感な少女と、流浪のロマ(通称、ジプシー)の一団の出会いと別れを哀感込めて描いた『悪魔、悪魔』(日本公開時「ディアブリー・悪魔」)。もうひとつは、シングルマザーに育てられている少女が、赤ん坊を誘拐し1日をとともに過ごすことで、自分の心の中にある愛の感情に目覚める寡作『鴉』(日本未公開)である。この2本がともに、同じ監督ドロタ・ケンジェジャフスカの作品であることを知るのは後のことである。この度、彼女の代表作『僕がいない場所』、



『木洩れ日の家で』を札幌で同時上映できる機会を得たことは、筆者にとって望外の喜びである。

ドロタ・ケンジェジャフスカは、1957年生まれの54歳、共産主義時代に教育を受けたが、卒業後は、すでに社会主義体制が崩壊しており、自由に表現活動を行えた最初の世代である。

母、ヤドヴィガ・ケンジェジャフスカも映画監督で、幼いころから母親の撮影現場について行き、興味を持ったという。その後、ワイダやポランスキーも学んだウッチ国立映画大学で本格的に映画製作を学ぶことになる。先述の『悪魔、悪魔』(1991)でグディニャ・ポーランド映画祭で最優秀監督賞・審査委員特別賞、『鴉』(1994)でプラス・カメルイメージ国際撮影芸術フェスティヴァル「金の蛙」賞、最新作『明日は、よくなる』(2010)でドイツ児童映画賞グランプリと、国際的に最も評価されているポーランド映画人のひとりである。

撮影を担当するのは、『鴉』の撮影を手掛け、それを機に彼女と結婚したアルトゥル・ラインハルトであり、彼女のその後のすべて作品で撮影を担当するだけでなく、『デューン/砂の惑星II』、『トリストランとイゾルデ』などハリウッドにも招かれるなど、彼の生み出す美しい映像に魅了され、彼に撮影を依頼する映画人は少なくない。ケンジェジャフスカとラインハルトは、現在のヨーロッパ映画界で最も魅力的なペアであると言える。 上映実行委員長 (さみつ・しんいち)

監督は2009年「大阪ヨーロッパ映画祭」のインタビューで次のように応えている。「ポーランド語のタイトルをそのまま英訳すると“Time to Die”死ぬべき時、終わりの時になるが、このポーランド語には、二つの意味があって、困った時に一体どうしましょう、という意味もある。公の場で死について語ることはタ

タイトルについて

ブー視され心の中にしまっておくべきという考えもあったが、映画を観ていただき、かえって死というのはそんなに怖くないもので身近に感じてほしかった。また、アルトゥルさんも「自分の人生をきちんと整理して、穏やかに死を迎えるというのが、美しく死を迎えることだと思います」と語っていた。

Aプロ

## 木洩れ日の家で

原題 Pora umierać  
2007年/104分



## 僕がいない場所

原題 I am/Jestem  
2005年/98分



監督・脚本・編集 : ドロタ・ケンジェジャフスカ  
製作・撮影・編集 : アルトゥル・ラインハルト

ヴウォデク・パヴリク	音楽	マイケル・ナイマン
ダヌタ・シャラルスカ クシシュトフ・グロビシュ パトリイツィヤ・シェフチク カミル・ビタウ	出演	ピョトル・ヤギェルスキ アグニェシカ・ナゴジツカ エディタ・ユゴフスカ パヴェウ・ヴィルチャック

# 木洩れ日の家で



Aプロ

この作品は、ケンジェジャフスカが、自ら敬愛するポーランドの名女優ダヌタ・シャフラルスカのために、自ら脚本を書き、監督したものである。物語は、91歳の女性アニェラの人生最期の数日間である。彼女は、郊外の森の中の古い屋敷にひとりで暮らし、街に住む一人息子もあまり訪ねて来ることはない。話し相手は愛犬フィラデルフィアのみと言う、孤独な女性である。

瑞々しい感性を持つアニェラは、戦前に両親が建てた家を愛し、この家を守ることに人生最後の情熱を傾ける。この屋敷を買い取ろうとする外の世界との確執、音楽クラブを主宰する若い夫婦とそこに通う子供たちとの出会い、それらはすべて彼女が最後に下す決心へとつながる。

登場人物と言えるのは、老女と犬と古い屋敷である。まるでシャフラルスカひとりが舞台に立つ演劇を見ているようである。物語はすべて彼女の視線を

通して描かれる。彼女の屋敷の売買を一人息子が独断で商談する場面、立ち退きを求められる若い夫婦の悩みはすべて、双眼鏡を通して覗く彼女の視点で描かれる。そこで何が起きているかはっきりとは分からず、観客にとっては非常にもどかしい。

しかしわれわれが、自分の周囲の世界を知るとは、まさにそのようなことではないだろうか。科学技術がいかにか発達しようとも、ひとは自分の五感を通してしか、世界を認識することはできない。公平になろうと、ひとがいかにか努めたとしても、結局は、自分が見聞きしたことを、自分の経験のみを基準に判断するしかない。

カメラを自由に移動させ、対象を真正面から撮るのではなく、アニェラの眼という限定された視点を通して語ることによって、彼女のこころの動きが、より切実に私たちに響く。自分が知り得た限られた情報のみを基に判断する時、ひとは独断や妄想から逃れられない。被害意識から、周囲の世界に対し敵対的な態度を取ってしまうことさえある。自分が眼にした限られた風景の中で、ひとはいかに善良であり続けられるかを、アニェラの人生の最後の数日間を通して監督は問うているように思える。

(さみつ・しんいち)

え、精神的に活動を続けている。



監督が最も尊敬しているポーランドの九十一歳の大女優

「ポーランド映画界の生ける伝説・世紀の女優」と称されて

去年の夏、ドロタ・ケンジェジャフスカ監督の作品をDVDで数本鑑賞する機会に恵まれた。すっかりその魅力にひきこまれた。

同じ頃、東京・岩波ホールで彼女の作品『木洩れ日の家で』が評判をよび、連日行列ができていくというニュースが入ってきた。少しでも早く観たい気持ちが高まり、サークル仲間と道内で先行する苦小牧の「シネマ・トラス」に足を運んだ(71号14頁掲載)。驚異のモノクローム映像は想像力をかきたて、主人公が現実世界とは違う確立された世界の

人であることを白黒で表現する。その美しさと死生観をあぶりだす静謐さがすばらしい。

日本には、人の幽玄の世界を表現し、受継がれてきた伝統芸能の能がある。その最高峰は高齢の女性を主人公にした老女物で、その姿を最高の芸術としてとらえている。能の中では、老いは美しく、完璧な存在だ。無駄がなく、まさに「人間の華」としての能の価値観に寄り添う不思議さが、この作品にはある。

(うじま・たいこ)



# 僕がいない場所

両親から捨てられ、孤児院で暮らす少年クンデラ。その孤児院から逃亡し、母親に会いに行くが、彼女のところに留まることもできず、川岸に佇む廃船に住みつく。ある日、彼の前にひとりの少女が現れる。彼女も、美しく賢い姉への劣等感に悩み、自虐的にアルコールに慰めを見出す孤独な存在である。似た者同士であるふたりの、こころの触れ合いを悲しく綴る。

ここでも、物語は、少年の視線を通して語られる。運動場で遊ぶ子供の輪、地元の少年グループ、川岸に暮らす裕福な家庭、パーティに興じる母の姿、川辺で石投げをする美しい少女、彼はいつも少し離れた場所から眺める。自分が入って行くことを許されていない場所、手に入らないものに思慕を込めて見つめる。この作品の原題は“Jestem”(英語に直すと、“I am”)、「僕はここにいる」という意味である。「ここにいるよ」とは、誰にも振り向いてもらえない時に、ひとが発する最も切実なことばである。『僕がいない場所』という邦題は、一見すると原題とは逆さまのように思えるが、自分が行けない場所を見つめるクンデルの姿を的確に表現した見事な訳である。



『悪魔、悪魔』、『鴉』を始め、彼女の作品のほとんどは子供を主人公にしたものである。それに対し『木洩れ日の家で』は老人が主人公となっている。社会の中心にはまだ入っていない子供と、その中心

から出て来た老人は、ある一定の距離を持って社会を眺めているという点では同じで共通している。『悪魔、悪魔』で登場するジプシーの集団と言い、いつも社会から疎外された存在に、ケンジェジャフスカは優しいまなざしを注ぐ。彼女の作品の大きな魅力が、夫ラインハルトのカメラによる映像美であることに筆者も異論はない。しかし、彼女の作品世界は芸術至上的ではなく、映像で見せる瑞々しい感性の内側に、鋭い社会意識を持ちあわせていると言える。老人の孤独死、親の育児放棄など、日本とポーランドという異国が、いかに共通の問題を抱えているかは、ただ驚くばかりである。アプローチによっては陰惨な作品になってしまうような難しいテーマを、繊細で善良な主人公たちのまなざしを通して表現することで、観る者は、肯定的な世界観を失わないでいられる。彼女の作品は悲しい結末のものが多いが、見終わった後なぜか、日々の生活の中でこころに堆積した汚れが浄化されているような気がする。

モノクロ映像、限られた視点、極端に少ないセリフなど、彼女の演出、夫ラインハルトのカメラは、表現したいことを付け加えて行くのではなく、余分なものを削り取っていくことで、レリーフのように対象を浮かび上がらせる。筆者が彼女の作品にこれほど魅了されるのは、日本人の感性に素直に響く、彼女の寡黙さゆえかも知れない。(さみつ・しんいち)

## 作品誕生のきっかけとは…

監督はある新聞記事に興味をひかれた。ひとつは少年が養護施設を抜け出し、彼を拒む実母のところへ帰る話。もうひとつは貧困に苦しむ大家族の少年が詩人になることをいつも夢見ていたという話だ。そして後者の少年に実際に会い、監督は映画化を決意する。また、日本でも『ピアノ・レッスン』以来、熱烈なファンを持つマイケル・ナイマンが音楽を担当したのは、ある映画祭での偶然の出会いからだったという。

クンデル(少年) / ピョトル・ヤギェルスキ  
Kundel / Piotr Jagielski

クンデル少年を演じたピョトル・ヤギェルスキは、撮影直前にシフィエントフウォヴィツェ近くの小さな町で見つけられて、主役に抜擢されたラッキーボーイである。7人の女兄弟がいる家族の中で育ち、映画初出演ながら、見事に主役をえんじた。



クレツズカ(少女) / アグニェシカ・ナゴジツカ  
Kuleczka / Agnieszka Nagórzycka

少女クレツズカを演じたアグニェシカ・ナゴジツカは監督が国中で子役たちを探している中で、養護施設で見つけられて今回の重要な役に抜擢された。初めての映画出演ながら、その存在感を見せつけ、この作品をきっかけに演技することに目覚めた。



## ポーランド映画セレクションII 短期集中で成果

昨年に続き実質2回目のポーランド映画セレクションは、入場者数で昨年に100名及ばなかったものの採算ラインをクリア、充実した映画祭を実現できた。大使館は「大成功」と喜び、実行委反省会は「今後も続けたい」と意欲的だった。ユーロ危機という伏兵により内容は直前まで流動的となり超短期決戦を強いられたが、実行委両団体(ポ文協・札幌映サ)会員の集中力と熱意で成功させた。



今年も美しいフライヤーに助けられた。(写真右)→会場前で最初に出迎える立て看板もバッチリ! ↑



→会場内に入るとまず受付カウンターがある(写真右上)2階のもぎり担当者は折り込みチラシも準備。(右下)



↑(左から)霜田副会長・チエホフスキ監督・ゴウェンピエフスキ監督。江別の「ファームレストラン食祭」にて。



映画クイズに正解するとDVDを観客2名にプレゼント。ゴウェンピエフスキ監督の粋なサプライズ!

→(右から)ゴウェンピエフスキ監督夫婦・チエホフスキ監督・ベテラン通訳はもちろんのこと大活躍の佐光実行委員長。



歌って踊って盛り上がった打上げパーティー! →



舞台挨拶での監督たち ↓ 左は眼鏡をはずしたカタジーナさん(ゴウェンピエフスキ夫人)4歳のお子様は母国でお留守番。ご夫婦での来札。



## 居場所の無い子供



映画『僕がいない場所』

柏木 由美子

もう何日体を洗ってないだろう。替えの下着も持ってないし、気持ち悪くないかな。映画は臭いは伝えられないけど、相当臭いんじゃないかな。まともなものを食べたのはいったいいつのことだろう。



成長期で、ちゃんと食べていてもしよっちゅうおながすく年頃だろうに。川岸に佇む廃船にすむクンデル=写真左下=は、着の身着のまま、食べ物も、あつたり、なかつたり、なかつたり…。靴が壊れたら、ゴミの中から拾ったガムテープのようなもので直してご満悦だ。クンデルは空き缶や鉄くずを集めてお金を稼いでたくましく生きているようにも見えるが、子供は社会的に弱い存在で、最低限の衣食住を与えて守ってやる大人が必要だ。クンデルは孤児院を逃げ出して母親の元に戻ったものの、母親のところには見知らぬ男がいて、クンデルの居場所はなかった。「寂しかったの、許して」と言い、息子よりも男を優先する母親の元を去り、クンデルは町をさまよい廃船に住み着いた。いったいこの母親は、息子が自分の元を去った後、どこにいったのか、何をしているのか、心配ではないのだろうか。まともな親ならこんなことにはならないだろうが、こうした育児放棄はいつの世もどこの国にでも起こることのようだ。

日本でも母親が何ヶ月も家に帰らず、幼児2人が飢え死にしたのはいつのことだったか。こういうニュースが報道されるたびに世間は震撼し、怒りと侮蔑の言葉

が飛び交う。事件を未然に防ぐために社会がなんとかしなくては、育児をしない親から子供達を守らなくてはと良識のある人は思うだろう。



しかし、映画の中で川岸に住む裕福な家の父親はクンデルのことを「ごみとしか思っていない」のだ。自分も娘2人を持つ父親なのに、娘と同じ年頃の男の子が廃船で浮浪者のような生活をしていても何とも思わないようだ。世の中には、育児を放棄する者、それを見て何とも思わない者もいるが、良心的な人もいる。この映画のなかで救いと思えたのは、川岸の裕福な家の次女クレツズカ=写真右上=だ。彼女はクンデルが小汚くて臭いのを気にする様子もなく、クンデルと心を通わせていく。一見恵まれているように見えるクレツズカも、実は劣等感に悩む孤独な存在だったのだ。

一方、虐待されたり育児放棄されたりする子供の方は、親のことをどう思っているかという、どうも憎んだり嫌ったりはしていないようだ。クンデルは再び母親の元を訪れた。ああ、これで普通の子供の生活に戻れるのかと、かすかな希望を持ったのもつかの間、母親はクンデルに冷たい目を向けて「どこかへ行って」と突き放す。母親に疎まれていることを再認識したクンデルは廃船に戻ってきて「ママは僕のことが嫌いなんだ」と言って泣きじゃくる。こんなひどい親なのに、それでも親に好かれたいというクンデルの気持ちが切なくて悲しい。

映画は冬から夏、そして黄金の秋へと、ポーランドの美しい季節の移り変わりも見せてくれる。クンデルのこの生活はいつまで続くのだろうと思っていると、クレツズカの姉がこっそり通報し、クンデルは警察(?)に保護され無理矢理連れて行かれる。警察官はクレツズカの父親がクンデルの存在を知りながら、放置していたことを、何度も「子供ですよ」と言って非難する。ここでもまともな人がいたことにほっとする。連れて行かれた先でクンデルは名前を聞かれるが名前の代わりに「Jestem」と答える。大人が勝手に付けた名前なんかどうでもいい、僕は僕なんだ、と言っているように思える。

このシーンで映画は唐突に終わる。えっ？これは最初のシーンと同じじゃない？振り出しに戻った。ああ、やっぱり、児童虐待、育児放棄は繰り返されるのだ。

(かしわぎ・ゆみこ)



### ポーランド映画セレクションII

日時	2012/5/5 (土)・6 (日) 10:00~19:00
会場	北大学術交流会館2階講堂 (310席)
Aフロ	『木洩れ日の家で』(2007)104分
Bフロ	『僕がいない場所』(2005)98分
Cフロ	『コヴァルススキ家の歴史』(2009)60分 / 『モルトケ』(2011)38分
Dフロ	『世界の夜明けから夕暮れまで』(2011) (ミンスク・キエフ・東京篇) 計123分
ゲスト	W・チェホフスキ監督=『モルトケ』、A・ゴウエンビエフスキ監督=『コヴァルススキ家の歴史』、同夫人
参加	502名(2日間延べ)、ワークショップ(初日のみ・無料)70名
料金	A, B(各1本)、C(2本)一般前1000円、当1200円、シニア前・当1000円、学当500円、D一律500円





本邦初公開の『モルトケ』、『コヴァルスキ家の歴史』の画期的な上映の影には  
今だから語れる「とっておきの話」が存在していた！



## 字幕製作の記

実行委員長 佐光伸一

◆ 札幌のファン まずお礼を申し上げたい。今回、我々は自前でプログラムを組むことを志した。中でも一番の挑戦は、日本未公開のドキュメンタリー作品を上映することだった。しかもテーマはホロコースト。ゴールデンウィークに付き合いたい作品ではない。しかし初日に100名近くのお客様が集まってくれた。これには大使館、来札した2監督もビックリしたらしい。大使館の担当者は「私が東京にいる限り、札幌のイベントは全面的に協力しますよ」というメッセージを私に寄せてくれた。『コヴァルスキ家の歴史』のゴウェンビエフスキ監督はポーランドの3つの新聞に札幌の映画祭について記事を寄せたとのこと。私は札幌の映画ファンの肥えた目に、ただただ感服するのみであった。

◆ 誰でも出来る？ 再び実行委員長の肩書を頂いたが職責は他の委員に丸投げし、実態は土壇場まで字幕製作者と化していた。何とか乗り越えたいま「パソコンとソフトがあればド素人でも簡単に字幕を作れますよ」という知人の言葉を会員諸兄に贈る。

ドクタ・ケンジェジャフスカ監督の劇映画2作は最初から有力候補だった。これとドキュメンタリーを組み合わせ「競演」させたい、と考えた。

チェホフスキ監督に相談したところ、彼が上映権を交渉できる何本かのドキュメンタリー作品があるが、英語字幕はあっても日本語字幕がないという。2月に上京した際、大使館の担当者に聞くと、大使館でも字幕作りは大金を払って外部に発注しているそうだ。帰りの機中ではすっかり弱気になっていた。



しかし、もはや引き返せない時期だ。仕事で2週間ほどヨーロッパに滞在し、少しハイな気分で「字幕も自分で作ってみるか」という無謀な思いに取り憑かれた。

◆ 地獄の1丁目 字幕の元になるシナリオは『モルトケ』『コヴァルスキ〜』両監督から直接いただいた。その日本語訳は、私の生業でもあり、さほど困難ではなかった。しかし、字幕付けの知識・技術はゼロ。

シロウト考えは、DVDからパソコン上に映像と音声のみを抜き取り、映像に字幕を付け、それをもう一度DVDに焼き付け合体するというイメージだったが、勉強してみると字幕というのは映像に焼き付けてあるのではなく、字幕用の文章と、何分何秒にこの文章を画面に出せという指示を書いた字幕用ファイルを個別に作成する。そして映像、音声、字幕ファイルをDVDに保存すると、DVDプレーヤーの方で字幕ファイルの情報を読み取り、映像、音声、字幕を合成して画面に映し出すという仕組みになっているらしい。私は「思っていたより簡単じゃないか」と、その日は作業を早めに切り上げ、独りで酒宴を催した。そこが地獄の1丁目とも知らずに。

◆ アブナイ夜 ゼロコンマ1秒まで正確にタイムラインを書きこんだ字幕ファイルが完成した。すると字幕が2秒以上も遅れて画面に現れる。タイムラインを微調整直したが、これも場面によって大きくズレたりピッタリ合ったりめちゃくちゃ。Googleで原因を捜し、新しい方法でトライし、失敗し、方法を練り直す。

この1週間は布団に入っても頭の中は回り続け、何か思いつくと跳ね起き、またダメ、また布団という



眠れぬ夜が続いた。

ヨーロッパの映像規格は PAL と言い、1 秒間に 25 コマの画像を映す。日本は NTSC 規格で 1 秒間 29.97 コマである。また家庭用 DVD プレーヤー用のファイル



カメラの調整に余念がないドキュメンタリー監督たち

形式(いわゆる拡張子)は VOB というものだが、一般的にパソコンで利用する映像ファイルは、Mpeg や AVI、DivX など他の形式が主流だ。こういったことが、どのように字幕に影響を与えるのだろうと、コンビニおにぎりを食べながら 72 時間ほど考え続けた。このときの私は、相当アブナイ状態にあったと、今は思う。

◆ 魔法のソフト いろいろ調べた結果、VOB ファイルはパソコン上では挙動が安定しないこと、VOB ファイルを AVI ファイルに変換するのは時間がかかるが難しくはないと分かった。さらに英語字幕の付いた映画を丸ごとスキャンし、そこからタイムラインと英語字幕を合わせて抜き取るという、まるで我々の映画祭のために開発されたかのような素晴らしいフリーソフトを発見した。そこから抜き取った



タイムライン付き英語字幕の英語の部分日本語に置き換え、それに映像と音声を合体させ DVD に保存。再生すると、バッチリだった。完成したのは 5 月 2 日に会場で機材を最終調整する 45 分前である。その DVD

を車に積み時速 100 キロで会場へ大暴走。映画のクライマックス気分だった。

◆ 吹っ飛んだ苦勞 一番の収穫は、同じ映像を何十回も見直し、作り手の編集作業に近い状態で作品と付き合えたことだ。恐らく観客にとって一番難物だったであろう『モルトケ』を、私は繰り返し鑑賞し、作品を貫く深い哲学を確認したし、チェホフスキ監督が編集の天才であることにも気付かされた。

『モルトケ』を繰り返し観るためにだけ 2 日続けて来場したという人がいた。戦時中のドイツ史に興味がおありで、ヒットラーを暗殺しない形の抵抗というモルトケの思想が、共産主義崩壊後の EU の構想につながっていくというのがよく分かったと、興奮した面持ちで筆者に語りかけてくれた。すべての疲れや苦勞が一気に癒された瞬間であった。

## 札幌でのポーランド映画の 開催について

映画『モルトケ』監督  
ヴァルデマル・チェホフスキ

ポーランド広報文化センターのホームページにアップされた文章の一部を転載したものです。  
<http://instytut-polski.org/event-archives/archives-film/563/>

<前文略> 日本では長期にわたるゴールデンウィーク期間中であつたにも関わらず、会場には 500 人を超える観客が集まつた。これらの事実は、北海道では、ポーランド映画およびポーランド文化に対し多大な関心を持っているということを裏付けている(以前、北海道を滞在した際にも、同様の印象を持った)。  
<中略> 今回の映画祭の実行委員長であり、北海道ポーランド文化協会の事務局長である佐光伸一氏は、ポーランド映画の普及に精力を傾けている。今回、彼は、劇映画とドキュメンタリー映画の競演というテーマを提案した。  
<中略> 現代のポーランド映画、モラルの不安派、ポーランド派を継承したこの素晴らしい作品に日本人はとりわけ興味を示し、このようなテーマを日本人も「自国の問題」あるいは「自分たちの問題」と認識している。個人の自由、歴史における人間の尊厳という問題(チェシロフスキの「偶然」あるいは「コヴァルスキ家の歴史」に関して)も、同様の感情を引き起こした。

日本自身、1 年前に悲劇を体験したからだ。札幌の住民、そして 2011 年の映画祭の観客の記憶がよみがえつた。それは些細ではあるが、重要なディテールである。フロアから、1 年前に見た作品の「陸軍大佐」の困難な運命に関する問いが出された。北海道新聞の記者からも、製作中の一部が昨年公開されたドキュメンタリー作品「Wazawai」の製作状況に関し、質問が出された。

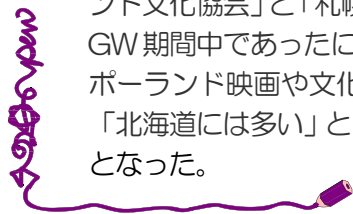
これらはすべて、文化の橋の建設が始まつたことを物語っている。数年前から具体的な出来事や、名前、事実に反応し記憶しているということが、ポーランドと日本の間での対話と、未来の共通のプロジェクトがこれからも継続するということを示している。(佐光伸一 訳)



## 観客アンケート

東京のポーランド広報文化センターの支援の下、「北海道ポーランド文化協会」と「札幌映画サークル」により実行委員会を組織。GW期間中であつたにも関わらず、会場には500人以上が集結。ポーランド映画や文化に対し多大な関心を持っている人たちが「北海道には多い」ということが裏付けられ、今後の活動の指針となった。

ご来場いただき、  
ありがとうございました！



<p>『木洩れ日の家で』…シアターキノで 2 回、今回で 3 回みました。『僕がいない場所』も両方とても良い映画でした。どちらの主人公たちも、人としての品性があります。この監督の映画を、もっと沢山みたくなりました。是非、他の作品もお願いします。(70代・女性)</p>	<p>歴史的な出来事など当時のヒトラーの残虐さを改めて感じました。その後の『モルトケ』を観て、こういうドイツ人もいたことに安堵しました。ドイツの大統領が先ずポーランドを訪れていることも嬉しく感じた。(60代・女性)</p>
<p>『コヴァルスキ家の歴史』『モルトケ』について。昨年からはラブ諸国に興味があり、より激しく心にひびきました。とても感動するとともに、この悲惨なことを2度とくり返さないようにと心しました。(50代・女性)</p>	<p>『コヴァルスキ家の歴史』『モルトケ』の2作品を鑑賞しました。他作品も観たいと思いました。本日見逃した作品の上映を希望します。監督さんがいらして驚きでした。(50代)</p>
<p>第二次世界大戦のドキュメンタリーは新鮮だった。クシジョフの現代における位置づけを知ることができてよかった。良質のドキュメンタリーを希望します。(50代・男性)</p>	<p>『トリコロール青の愛/白の愛/赤の愛』、『ふたりのベロニカ』などの上映を希望する。これからもポーランド映画を続けて欲しい。(50代・女性)</p>
<p>これからもメジャーではない作品を希望します。(20代・女性)</p>	<p>『僕がいない場所』は、『誰も知らない』に似ていますね。どこの国でも子供が弱い人が苦しむ今世紀なのでしょうか。(60代)</p>
<p>音楽が美しい、良質の作品だった。(20代・女性)</p>	<p>5月5日はAプロ『木洩れ日の家で』のみ見る。深々とした情感に共感はするが、日本で紹介されるポーランド、ソ連、ロシア映画と言え、このようなインテリ好みの映画ばかり。単純でノーテンキな映画はインテリ好みではないせいか、省みられないようだ。佐光氏は現在の映画に関心がおありのようだが、私の観たいのは戦後の「ポーランド派」より前のポーランド共和国が若いころのイディッシュ映画や無声映画、ミュージカル映画、1935年の『アンテイ』や37年頃の映画だ。その頃のウーファ作品ならば、国立のシネマテークで見たこともあるし、DVDも安く手に入る。しかし、ポーランド、ハンガリー、チェコのこの頃の作品は私にとっては全くの霧の彼方。ただポーランド映画に関しては貴実行委があるだけ、まだ可能性があり、もしかかもしれない。</p> <p>1936年 Yidl mitn Fidl 1937年 Der Dibule 1938年 LUdzie Wisly どんな映画なのだろう。(50代・男性)</p>
<p>来年もポーランド映画よろしく御願ひします。(50代)</p>	
<p>つらい現実と向き合いました。いかに生きるか。過去、現在、そして明日へ。(60代・女性)</p>	
<p>字幕が消えるのが早かった。(60代・女性)</p>	
<p>『コヴァルスキ家の歴史』『モルトケ』両作品とも想像していた以上に重く大きなテーマとして私たちが忘れずに伝え、考え、こうどうしていかなければならないことを教えてくれるフィルムでした。感動です。両監督にお会いできたことも本当に光栄でした。(40代)</p>	
<p>スタッフの対応もやさしく、映画もとてもよく感動した。また上映希望します。(50代・女性)</p>	
<p>次回も是非企画願ひします。パンフレットの販売もぜひ願ひします。(70代・男性)</p>	
<p>来年もポーランド映画よろしく願ひします。(50代)</p>	

